

アメリカ・フロリダ州立大学教職課程科目における

教育と研究の結びつき

尾場 友和
(広島大学大学院・院生)

1. はじめに

本研究では、広島大学大学院教育学研究科「教職課程担当教員養成プログラム」(以下、教職 P) が抱える課題である「教職課程科目担当者にとっての教育と研究の結びつき」について、アメリカ・フロリダ州立大学(以下、FSU) 教職課程科目におけるフィールドワークをおこない、そこでの実践事例から大学の授業における教育と研究の関係とその背後にある授業観を検討していく。

大学での授業は、小中高校段階までとは異なり伝統的に研究者が教育を担うことになっている。このことは教職課程科目においても基本的には同様で、大学教員には授業科目に内包する専門知識を伝えつつも、自らが取り組んできた研究上のエッセンスや研究関心に生起する批判的なものの見方を活かした授業が求められている。だが教職課程科目の場合、研究者がときとして批判対象とする事象が、教員採用試験などの公的な場では正統な知識として受け入れられることもあり、授業者は研究者としてのスタンスを維持すべきか、それとも正統な知識の伝達エージェントとしてふるまうべきかのジレンマに遭遇してしまう(尾川・森下 2012)。

このような認識に立った場合、FSU 教職課程科目に目を向けることは日本の教職課程担当教員にとって非常に示唆に富むと考えられる。なぜなら FSU では、大学院生が TA として授業をおこなう学部教育のことを大学院教育の一環と捉え、授業者として必要な資質・能力を育成する指導が積極的におこなわれているからだ。したがって、FSU でおこなわれている TA 支援や TA の教育活動を分析していくことで、教職課程科目における教育と研究の結びつきについて新たな視座が導かれることが期待できる。

そこで本稿では、FSU で開講されているある教職課程科目でのフィールドワークを通じ、TA への支援や TA の教育活動を中心に分析していく。具体的には TA オリエンテーションやワークショップ、授業の監督・指導教員からの支援、TA の授業実践を中心にみていきたい。その上で、これらの検討により導出された授業観を教職 P が抱える課題に照射することで、これまでの課題認識に対して再考を迫りたい。

2. 調査の概要

筆者は、2012 年 8 月半ばから 9 月にかけての約 5 週間、フロリダ州の州都タラハシーに位置する FSU でフィールドワークをおこなった。調査校を選んだ理由は、FSU 教育学研究科が広島大学教育学研究科と非常に似通った学科構成になっていることにある。具体的には、双方とも修士課程と博士課程を有する研究大学で、学校教員の養成だけでなく研究者

養成もおこなっており、そのため、教職課程科目を担当する TA は教職 P と共通の課題を抱えていることが予想できる。

また、アメリカの大学における TA 制度に照らし合わせた場合、FSU 教職課程科目の TA の実態は、アメリカの全国的な動向とそう大きく変わらないことが推測される。というのも、1960 年代に連邦議会等で問題視された TA の授業の質を背景に、全米で TA を教育するためのプログラムが普及し、TA が授業を担当すること、大学が TA を育てることは、もはや自明のことになっているからだ（荻谷 2012）。そうした TA 制度の文脈に照らした場合、FSU の TA が授業をするということは決して珍しいこととは言えないのである。

さて、本調査は教育学部 1 年生に配当されている幼小中高共通の教職課程科目、「教職概論」を対象におこなった。「教職概論」では、学生の希望に基づき 8 つのクラスに分かれて授業が編成され、75 分授業が週 2 回の割合で組まれている。筆者は、TA インターンとしてすべてのクラスに関わりながら、授業内外での TA の活動を参与観察した。

つぎに、「教職概論」を担当する専任教員並びに TA のプロフィールを見ていこう（表 1）。「教職概論」では、専任教員 1 名と TA 7 名の計 8 名がそれぞれのクラスを授業担当し、専任教員が TA の授業の指導監督も兼ねている。一瞥してわかるように、授業担当者の特徴として次の点があげられる。第一に、TA 学生のほとんどが Ph.D. 学生であるが、必ずしもそれが必須条件ではないこと、第二に、授業担当者全員が教職経験者であること、第三に、授業者の研究テーマは教育学領域の多岐にわたっていること、である。こうした特色の背景についてクリス先生に尋ねると、教職経験のある TA には教科書だけでは伝わらない実際の学校現場の提示やスムーズな授業運びが期待できるため、教職経験を重視して TA を採用しているとのことであった。

表 1 「教職概論」授業担当者のプロフィール

名前 (仮名)	学位等	主な職歴	研究テーマ
クリス リ	Ed.D 学位取得 Ph.D 留学生	小学校教員 大学と高校の教員	体育教育学 大学院留学生の学生文化研究
デービス ウォーラー	Ph.D 留学生 Ph.D 学生	大学と高校の教員 高校の教員	移民における異文化交流の過程に関する研究 高校段階での学力に関するマイノリティー研究
マリア キャッシー	Ph.D 学生 Ph.D 学生	小学校教員 小学校教員	幼少期の子どもに対する指導に関する教師研究 教師の自己効力感とリテラシー教育
ポール メグ	M.A 学生 不明	高校教員 不明	科学教育の哲学的考察 不明

3. TA の授業に対する支援

3. 1 大学からの支援

では、実際に TA が授業していくにあたり、大学からはこういった支援がおこなわれているのだろうか。ここでは全学機関 the Graduate School による Program for Instructional Excellence（以下、PIE）から 2 つの支援を取り上げたい。

1 つは、全研究科 TA を対象に学期開始前の 2 日間にわたっておこなわれる TA オリエンテーションである。TA オリエンテーションは、およそ 400 人収容可能な大講義室で朝 9 時から夕方まで新採用の TA を中心にほぼ満席に近い状況でおこなわれる。そこでの講義内容を示すと表 2 になる。ご覧のように、州政府や大学が定める個人情報保護や教育に関

表 2 TA オリエンテーションの内容

第 1 日目		第 2 日目	
8:30-9:00	受付・資料配布	9:00-10:05	効果的な教授法
9:00-9:30	あいさつ	10:05-10:15	休憩
9:30-9:40	全体の概略	10:15-11:00	評価と実践
9:40-9:50	休憩	11:05-11:35	多様な学生への理解
9:50-10:40	授業に関する大学の指針	11:40-12:05	質疑応答
10:45-11:15	レポート、採点、授業評価	12:05-1:10	昼食
11:20-11:55	プライバシー保護	1:10-1:40	教室運営
12:00-12:30	教材に関する討論会	1:45-2:15	自己管理法
12:30-1:30	昼食	2:20-3:30	TA による討論会
1:30-2:00	困った学生への対応	3:35-4:00	おわりに
2:05-3:00	授業運営		
3:05-3:25	障害のある学生への対応		
3:30-4:00	教育方法の基礎		
4:00-4:10	休憩		
4:10-5:00	人種差別・性差別		

する法律・規則をはじめ、大学で教壇に立つのに最低限必要なルールや、学生対応の仕方などが講義されることになっている。さらに希望する学生には、両日の出席と3つの課題レポートを提出することにより PIE から証明書が授与され、所属部局によってはこの証明書の取得が TA に携わる条件になることもあるらしい。

こうした TA オリエンテーションに対し、学生はどのような印象をもっているのだろうか。主催者側が

講義室に用意したツイッターボード(図1)を見てみると、新任 TA や留学生 TA からは「不安が解消された」や「少し自信がもてた」など肯定的な書き込みが多い。だが、研究科によって TA の活用実態に違いがあり、経験者と思われる TA からは「(講義の内容が) 理想論に過ぎない」といった書き込みがされ、会場が一時盛り上がる場面も見られた。全体を通じてこのセッションは、アメリカの大学(あるいは、アメリカそれ自体)の実態についてあまり詳しくない TA 初心者向けのガイダンスといった趣きを感じられるものであった。

さて、もう1つ取り上げる PIE の TA 支援が、不定期に開催される職業的発達を促すワークショップである。講座は全18回で構成され、留学生への対処の仕方や人前での話し方、授業の進め方など授業にまつわる身近な話題について1時間完結型でおこなわれる。これらの講座には、30人くらいしか入らない小さな教室が充てがわれ、少数ながらもテーマに強い関心を持つ学生が集まっている。講座は、まず参加した TA が自己紹介を兼ねてテーマに関する経験や課題を話すところから始まり、講師が与えたテーマに関するディスカッションを経て最後に講師がまとめ上げるといった流れでおこなわれる。このようなワークショップは、TA がテーマについて詳細に学ぶというよりはむしろ、TA をしていくなかで感じる課題を授業内容の担当領域を越えて他の TA や専門家(講師)と意見交換をし、解決に向けてのヒントやその過程で生じる心理的負担の軽減(癒し)を得に来ているような印象を感じさせるものであった。実際、ワークショップ終了後には TA 同士がお互いの連絡先を交換し、晴れやかな笑顔で退室していく姿もしばしば見かけられた。



図 1 講義室のツイッターボード

以上のように大学が提供する TA 支援は、TA として必要な総論的な知識の理解や学生間のサポートネットワークづくりにおいて長けているように思われた。しかしそこで見られた支援のスタンスは、授業現場への具体的な支援ではなくむしろ TA が授業をしていくための基礎固め支援に留まり、実際のプラクティカルな側面については、授業を監督指導する専任教員の支援に委ねられるところが大きいように思われるものであった⁷。

3. 2 TA に対する授業の監督指導者からの支援

つぎに授業を監督指導する専任教員がおこなう TA 支援について、クリス先生が TA に指示する授業の進め方からその内実に迫りたい（表 3）。

クリス先生の TA に対する最初の働きかけは、学期開始前に送られる電子メールに始まる。そこには A4 サイズ 3 枚程度の量で使用教材の指定、授業の進め方、評価の観点や頻度などが示されている。こうした詳細な指示を全 TA に示す背景には、クリス先生が考える TA 支援の原則が含まれているように思われる。そこで、こうした指示を出した意図についてクリス先生に尋ねると、きっぱり次のように答えてくれた。

TA によって授業内容がバラバラにならないようにするためなんだ。そうしないと学生に不平等が生じるからね。

ここから読み取れることは、TA のおこなう授業では、その内容や進め方の全てが TA に任されるのではなく、TA 間で教える内容においてバラつきが生じるのを未然に防ぎ、どの TA の授業でも質が一定になるように求められているということである。こうしたクリス先生の指示は、どの授業を受けても同じ教育サービスが受けられるという学生側のメリットを考えてのことだが、TA にとっても非常に大きな恩恵だといえる。というのも、表 3 にあるように、教科書会社が供給する教材を使用することにより、授業の構想やその準備にかかる時間・労力が大幅に削減できるからである。例えば、指導書は全 162 頁からなる分厚いもので、章の概要、それぞれの指導のポイント、章の導入時に関わる発問例、教科書内容確認のためのドリル、資格試験準備のためのドリルなどが各章ごとにまとめられている。さらに、教科書専用ウェブサイトが設けられ、TA は章に応じた映像資料にアクセスできるようになっている。こうした教科書の指導書等の使用について、TA は非常に好意的に受け

表 3 クリス先生からの TA への指示内容

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①同じ教科書、教科書会社が提供するウェブサイト、指導書を使用すること。②教科書会社が提供する指導用ビデオ、パワーポイントを使用すること。③全ての学生を観察実習に参加させること。④シラバスを作成し、学部が求める必要項目が記載されているか確認すること。⑤頻繁にテストをおこなうこと、例えば、小テストは 1 週間あるいは少なくとも 2 週間に 1 回は小テストをおこない、ときにはグループ学習への参加態度や臨地実習のレポートを評価に入れること。⑥課題にある教育委員会での会議や学校の職員会議の内容に関するレポートを評価に入れること。⑦最終試験をおこなうこと。 |
|--|

⁷ 例えば、PIE の講義中、TA 学生から具体的な授業場面に関する質問を受けた際、PIE スタッフは明確な回答を避け、学生が所属する研究科の指導教員に指示を仰ぐように返答していた。

止めている。キャッシーさんは、そうした資料が授業づくりでどれほど役立っているのか、率直な実感を語ってくれた。

授業の準備はなにも必要ないわ。私はパソコンが苦手だから、パワーポイントの再編集とかに時間がかかるくらいかしら。あと時間がかかるといったら提出物のチェックくらいよ。

他の TA にも同様の質問をしてみたが、表現に違いがあるにせよほぼ同じような内容であった。このように TA を監督指導する専任教員の支援は TA の授業を受講する学生への配慮とともに、授業者である TA の授業支援を効率よく両立させていたといえるだろう。

だが批判的な視座を持ち合わせている研究者が授業をするという伝統的な大学教育の特性に照らし合わせた場合、こうした支援はかえって授業者の研究関心を授業に取り入れていくことを困難にさせ、研究者アイデンティティとの対立が生じさせてしまう可能性がある。そこで次節では、「教職概論」における教育と研究の結びつきについて検討していく。

4. 授業における教育と研究の結びつき

では、TA がおこなう授業において、教育と自らの研究がどのように結びついているのだろうか。

まずは、補足的におこなった TA7 名（回答数 6 名）への意識調査結果を少し見てみることにしよう。サンプル数は少なく厳密な統計分析はできないが、単純集計からおおよその全体像を浮かび上がらせることができると考えられる。そこで研究関心と授業内容の関連度について 5 段階（deeply=5～nothing=1）で尋ねてみた。TA 回答者 6 名のうち、2 名は研究と授業内容に強い関連性(5)を感じているが、残りの 4 名は各段階にそれぞれ 1 名ずつ分散しており、TA の研究関心と授業内容との結びつきは一様ではない。このことは、先にみた TA のプロフィール（表 1）の特徴も含めて考えれば、「教職概論」の授業には授業者の研究と授業が強く結びついているとはいえないだろう。

では、実際に TA はどういった授業をおこなっているのだろうか。そこで、TA と受講学生の双方が慣れてきた第 3 講目の授業（授業者：リさん）の様子をドキュメントし再現してみよう。

授業は時間厳守でおこなわれる⁸。授業開始 10 分前くらいから学生や TA が教室に集まってくる。学生は、クッキーやリンゴなどを口にしながら教科書を読んだりして授業のはじまりを待つ。筆者の見るかぎり、おしゃべりしている学生はほとんどいない。TA は、今日の授業進行の予定をホワイトボードの端に書き留め、パワーポイントの準備をしながらも、学生が入室するたびに hello と挨拶を交わす気配りをする。フレンドリーな雰囲気

表 4 リさんによる第 3 回目授業

時程	授業内容
11:05-11:20	授業開始後、予習の確認テストをおこなう。
11:20-11:34	前回の授業の確認、及びアメリカの教育が直面している課題の用語を説明する。
11:34-12:00	都市・郊外・田舎の各地域による教育の違いを議論し発表させる。
12:00-12:20	教科書に沿って本時の授業のまとめを説明する。

⁸ リさんは、時間厳守の背景に学生が履修単位数にしたがって授業料を支払う仕組みを取り上げ、学生は消費者としての意識が強いことをあげていた。

つくり、学生との信頼関係を築いていくことも授業者としての大切な仕事なのだろう。そうこうしているうちに授業開始時刻がやってくる。TA が前に立ち学生に話しかけると、教室の雰囲気は瞬時に授業モードへと変わっていく。

TA は簡単なあいさつをするとすぐにワークシートを配り出し、前回指示された予習範囲（教科書約 30 頁）の確認テストをおこなう。語句確認が主な内容の記述式で、学生は自らの記憶を辿りながら熱心に取り組む。なかには早く仕上がり（あきらめてかもしれないが）、終了時刻よりも答案を早く提出する学生もいるが、ほとんどは終了時刻まで粘り強くテストに向き合う。およそ 15 分間のテストが終わると、TA は手際よくテストの内容をパワーポイントに写し出し、答え合わせを兼ねながら用語の解説をおこなう。一通り解説を済ませると、今度は授業の山場、グループディスカッションのセッションに移る。

ディスカッションは予習範囲のテーマにあがっていた内容をグループで討議させる形式でおこなわれる。討議の約 10 分間とその後の発表 20 分間、TA は各学生の議論への参加度合いや教科書内容との則し具合、学生の議論が論理的であるのかなどをチェックし、成績評価の判断に使う材料を適宜メモしていく。

発表が終わる頃になると授業も終盤に差し掛かり、学生も TA も時計を気にし出す。TA は板書した予定表どおりの進行を目指すべく、今日扱った章でまだ解説を加えていない項目をパワーポイントで解説し、学生が適宜してくる質問の挙手に滞りなく対応しながら授業を進めほぼ終了時刻きっかりに授業は終わる。

他の TA の授業も観察したが程度に違いはあるにせよ、どの TA も同じようなパワーポイントやワークシートを使用し同じような授業をしていた。そこには TA の研究上の視座といった研究者としての側面がみられず、フォーマルな授業が展開されていた。

こうした実状は、大学の授業を教育と研究が結びつくアリーナとして受けとめてきた伝統的な授業観とは異なるものであり、「教職概論」の授業観を問わざるをえない。そこで、授業の監督指導をおこなうクリス先生に、「教職概論」と自らの研究との関係を尋ねることにした。専門外の授業を担当する大学教員として悩みの肝所のつもりで聞いた質問であったが、クリス先生の回答はこれまで前提としてきた大学の授業観をひっくり返す思いもかけないものであった。

学部レベルの授業で、研究の話をしても意味がないし、学生はついて来ない。それに彼らは教師になりたいくて授業をとっているんだ。研究の話を聞きたくて取っていないからね。この教科書どおりにやっておれば、それで十分。授業準備も少なく済むし、その分、教員も研究ができるんだ。理にかなっているだろう？

筆者は、滞在中、複数の TA や大学関係者にも同様の質問を試みたが、クリス先生の回答から大きく外れるものではなかった。

以上のように、「教職概論」の授業では教育と研究が結びつくというよりはむしろ、教科書の内容を取りこぼすことなく伝えることに重点が置かれ、授業者は指導書などを使用しながら教育することに専念しているように思われた。そこには、「学部レベルの授業」では研究者としての視座が組み入れられず、自らの研究とは結びつき難い授業をよしとする大学授業観が展開されていたと言えるだろう。

5. おわりに

これまで FSU の教職課程科目「教職概論」でのフィールドワークから、アメリカの教職課程科目における教育と研究の結びつきについて検討してきた。

そこで明らかになったことをまとめると、以下のようになる。第一に TA 授業担当者の研究関心が必ずしも科目の内容とは一致しているわけでないということである。とりわけ授業者には、研究領域と授業科目との整合性というよりはむしろ教職歴が重んじられ、教科書の内容を確実に学生に伝え授業運営できるかが授業者に求められていた。第二に、TA に対する支援は大括りを大学がおこない、授業を監督指導する教員が実際の授業運営に関わる支援をおこなっていたことである。これらの支援は、TA が授業実践していく上で直面する課題を未然に防ぐことで学生に利益をもたらす、かつ、効率よく授業ができることから TA にも大きな利点があると考えられるものであった。第三に、「教職概論」の授業では授業者に研究との結びつきを迫らないことを許容する授業観が存在していたことである。つまり学部レベルの教育では、学生を学術的な視座に誘うことを課さず、授業科目に沿った知識を身につけさせることに重点が置かれていた。そうした学部授業観は、研究関心とは異なる科目であっても TA が授業することを可能にし、大学でおこなう授業＝研究者がおこなう授業という教職 P が考える授業の前提とは異なる授業観を浮き上がらせる結果となった。

以上のように、FSU における TA の「教職概論」では、教育と研究の結びつきを意識したものではなく、教職課程科目における教育と研究の結びつきに関心をもつ教職 P とはかけ離れたものだったといえるだろう。最後にそうした距離を生み出した要因として考えられる 2 点を仮説的にあげておく。1 つはアメリカの学部教育が専門教育よりも教養教育を重視している点である。すなわち、ある事象を学術的な観点から深く掘り下げるよりはむしろ、教科書に書かれてある内容を理解しディスカッションを通じて深めていくという教育観は、少なからず「教育概論」の授業にも影響していたはずである。もう 1 つは、日米における教師の仕事内容の違いである。日本の教師は、職務領域が限定的なアメリカとは違い、授業だけでなく生活指導、進路指導、部活動の指導のように際限なく職務領域が広がっている。そうした教職実務の違いは、日本の教員養成段階において目指される授業にも影響を与えている可能性が考えられる。つまり、教職課程科目を通じて知識を身につけるといよりはむしろ、すぐには役に立たないかもしれないが各領域の科学的視点を身に付けた省察できる教師の育成が期待されているのかもしれないのである。

しかしながら、本稿には、以下のような解釈の限界を含んでいる。まず 1 つが筆者の観察後、FSU「教職概論」でどのような授業展開がされたのか情報収集をおこなったが、十分な検討にまでは至っていない点である。さらに教職課程科目という性格上、国・州政府の指針等が授業運営に少なからず影響を与えていることが推測できるが、今回の分析にはそうした点を十分射程に入れることができなかった。これらの点は本課題をさらに検討を進めていくにはとても大切であり、今後はこうした点も踏まえた分析をおこないたい。

参考文献

有本章,2005,『大学教授職と FD—アメリカと日本—』東信堂.

Kauchak Donald and Paul Eggen,2010, *Introduction to Teaching : Becoming a Professional 4th ed.*, : Pearson.

広島大学大学院教育学研究科,2010,『Ed.D 型大学院プログラムの開発と実践～教職課程担当教員の組織的養成～』平成 19-22 年度文部科学省大学院教育改革支援プログラム最終報告書.

苅谷剛彦,2012,『アメリカの大学・ニッポンの大学－TA、シラバス、授業評価－』中央公論新社.

苅谷剛彦,2012,『イギリスの大学・ニッポンの大学－カレッジ、チュートリアル、エリート教育－』中央公論新社.

尾川満宏・森下真実,2012,「教職教育と教育学研究のジレンマ－『教職授業プラクティカム』の経験から」『教育学研究紀要』57 (2) :664-668。

The Florida State University The Graduate school,2012,*TA Orientation Handbook Fall 2012 ed.*

【付記】

本研究は、平成 24 年度広島大学大学院グローバルインターンシップ (G.ecbo) プログラムにおける調査成果の一部である。